



セヴラック通信

Courrier de Séverac

第15号

2013 後期

日本セヴラック協会・会報

Société Déodat de Séverac - JAPON

21

第 21 回例会
2013 年 11 月 16 日(土)
術芸館

プログラム

例会

15:00-17:00

【演奏】

小阪亜矢子 (MS) ・ 内藤 晃 (Pf)

セヴラック：歌曲《夢》

Déodat de Séverac : Un rêve (E.A. Poe, trans. S. Mallarmé)

内藤 晃 (Pf)

アルベニス (セヴラック補作) : 〈ナヴァエーラ〉

Isaac Albeniz (fragment, completed by D. de Severac) : Navarra

館野 泉 (Pf)

シサスク：組曲《エイヴェレの星》op.142 より

U. Sisaski : süit "Eivere tähed" vasakule käele op 142 (extract)

～休憩～

【演奏とお話】

末吉保雄

セヴラック：歌劇《風車の心》について その 9

森 朱美 (S) ・ 鎌田直純 (Bar) ・ 森田 学 (Bar) ・ 末吉保雄 (Pf)

特別出演 柴田 暦 (Vo) ・ 館野 泉 (Pf)

セヴラック：歌劇《風車の心》第 2 幕第 4 場より

Déodat de Séverac : Extrait de "Le coeur du Moulin" Acte 2, Scène 4, (M. Magare)

懇親会

17:00～

大田黒公園散策 ① ●末永理恵子	5
〈連載〉セヴラック随想 (6) ●濱田滋郎	9
〈連載〉セヴラックと私 ●松田純子	13
第20 回例会の報告 ●鎌田和夫	15
第21 回例会プログラム	3

[新連載]

大田黒公園散策 ①

大正初頭に新しい音楽を伝えた大田黒元雄

末永理恵子／文・写真・地図

荻窪駅から徒歩10分、かん芸館からは3分ほどのところに杉並区立大田黒公園がある。杉並区有数の紅葉の名所で、今年もライトアップが行われる（11月26日から12月5日まで。この期間は午後8時まで開園）。筆者が訪れたのは10月末で、気の早い二枝ほどが赤い葉を付けているのみであったが、門から続くイチョウ並木を通り抜け、樹齢を重ねた巨木が木蔭を作る小径に沿って、小川のせせらぎを見ながら池に向かって歩いて行くと、とてもここが東京だとは思えないような気分を味わうことができた。パンフレットには、「大田黒元雄氏の屋敷跡を杉並区が日本庭園として整備し、昭和56年10月1日に開園したものです」とある。音楽評論家の草分けとして知られる大田黒元雄が昭和8年から86歳で没するまでの47年あまりを過ごした土地が公園の30%を占め、周囲の土地と合わせて回遊式の日本庭園が作られたそう。昭和8年建築の大田黒の仕事場はピンク色の壁を持つ洋館で、そのまま公園内に残され、記念館となっている。記念館は暖炉のある広間が公開されていて、おそらくタイル張りと思われる壁に囲まれ、寄木の床には家具とともに、蓄音機や寄木細工の美しいスタインウェイ（1900年製）が置かれている。

この部屋の持ち主が使っていたままの照明器具が発する控えめな光と窓からの光で照らされている棚には、印象主義絵画のような微妙なトーンのモノクロ写真が9点飾られている。大田黒は、芸術写真の分野でも先駆者の足跡を残していて、大正10年に結成され、関東大震災まで続いた写真芸術社のメンバーとして活躍していたのである。それ以外にも、推理小説、野球や相撲、ネクタイ、汽車など興味の範囲は広く、ラジオ番組「話の泉」（1946年から64年まで放送）に出演して、幅広い層から人気を博した。



大田黒公園正門



庭園から記念館を望む



大田黒記念館

◆大田黒元雄のプロフィール

大田黒元雄（1893.1.11-1979.1.23）が注目され始めるまでのプロフィールを記しておこう。父の大田黒重五郎（じゅうごろう）（1866-1944）は、東京外国語学校（現東京外国語大学）と東京商業学校（現一橋大学）を卒業し、芝浦製作所の再建と、水力発電事業の発展に功績のあった実業家であった。また、二葉亭四迷の親友で、『浮雲』は大田黒重五郎がモデルであるといわれる。この父と、母らくとの間に生まれた一粒種が元雄である。東京生まれだが、母が療養していた小田原で少年時代を過ごし、1910年に神奈川県立第二中学校（現小田原高等学校）を卒業。ピアノをハンカ・ペツォルト（1862-1937）に学んでいる。ペツォルトはノルウェー生まれで、ヨーロッパ各地で活躍したのちに仏教研究家の夫と共に来日し、東京音楽学校で声楽とピアノを教えた名教師・演奏家である。さて、大田黒は1912年に留学のため、イギリスに旅立つ。ロンドン大学で経済を学びながら、音楽会や演劇等の公演に熱心に足を運び、留学中は東京音楽学校校友会誌『音楽』に寄稿している。1914年7月に一時帰国のつもりで帰国したが、第一次世界大戦が勃発して東京にとどまることを余儀なくされ、本格的な執筆活動に入る。

◆『バッハよりシェーンベルヒ』

大田黒の著書・訳書は約100冊あると言われ、日本の音楽界に大きな影響を与えた。なかでも、帰国翌年の1915（大正4）年5月に山野楽器店から発行された『バッハよりシェーンベルヒ』は、早い時期に同時代の音楽まで含めて日本に紹介した画期的な書物で、長い間音楽史の基本文献として読み継がれた。3年後には正篇で紹介しきれなかった作曲家の情報を盛り込んだ『続・バッハよりシェーンベルヒ』（音楽と文学社、1918）も出版される。類書がなかなか出なかったために長く使われすぎたのか、一時は学術的正確さに欠けると批判されたりもしたが、近年は日本に西洋の音楽を紹介した先駆的業績として見直されつつある。以下に、目次を転記してみよう。

『バッハよりシェーンベルヒ』本文に取り上げられた作曲家

バッハ／ヘンデル／ゲルック／ハイドン／モツァルト／ケルビニ／ベートーヴェン／
 ウェーベル／チェルニー／シューベルト／マイエルベーヤ／ロシニ／ドニゼッティ／ベリ
 ニ／メンデルスゾーン／シューマン／ショパン／リスト／ワグナー／ベルリオズ／ヴェル
 ディ／グリンカ／ダルゴミジュスキイ／フランツ／ゲーノー／フランク／ブラームス／ビ
 ゼー／ルビンシュタイン／チャイコフスキイ／バラキレフ／クイ／ムースルグルキイ／ボ
 ロディン／リムスキイ、コルサコフ／ドヴ（ラ）ルジャック／サン、サーン／マスネー／
 プルッフ／グリーグ／フォーレー／ダンディ／フムパーディンク／エルガー／シャルパン
 テイエー／ウォルフ／マスカーニ／レオンカヴァロ／プチニ／アレンスキイ／デビュシイ
 ／シュトラウス／グラズーノフ／シベリウス／スクリアピン／チェレプニン／ラハマニノ
 フ／コレリツヂ、テイラー／ストラヴィンスキイ／シェーンベルヒ

作曲家によって紙面の割き方はまったく異なるが、正篇の本文には60人の作曲家が取り上げられている。「フランツ」はリート作曲家のロバート・フランツ（1815-92）、「シュトラウス」はR.シュトラウスである。序文に、取り上げる作曲家の選択理由として、「一つには古典楽の大家の評伝は、いくらでも外国書の中に求める事が出来るから、此の様な小さな本の中に左程書く必要が無いと思ったからで、又一つには近代楽を好む自分の傾向が、自然とかういふ結果を生んだのである。」と書かれている。しかも、同じ序文の最後に、「二十二歳から三歳へ掛けての労作」とあることも、驚嘆に値する。附録には「本文掲載以外の百楽家」が紹介され、2、3行ずつコメントが記されている。さらに、その中からピックアップされた作曲家とその他の作曲家が、続編で詳述されることになる。続編に取り上げられた作曲家は下記の通りである。

『続・バッハよりシェーンベルヒ』に取り上げられた作曲家

チャドウィック（ジョージ・ウィットフィールド）／マーラー（グスタフ）／レッフラー
 （チャールス・マルティン）／マクダウエル（エドワード）／デリウス（フレデリック）
 ／デューカス（ポウル）／グラナドス（エンリク）／バントック（グランヴィル）／シェ
 ミット（フローラン）／ハドレイ（ヘンリイ）／ウィリアムス（ヴォーン）／ラヴェル（モ
 ウリス）／カーペンター（ジョン・アルドゥン）／スコット（シ rilル・メア）／ブリッヂ
 （フランク）／キャドマン（チャールス・ウェークフィールド）／グレインジャー（パー
 シイ・アルドリツヂ）／バックス（アーノルド）／プロコフィエフ（セルゲイ）／オルン
 シュタイン（レオ）

今これらの人名リストを見ると、すでにほとんど顧みられなくなってしまった作曲家の名前が多数見られ、たいへん興味深い。チャドウィックはアメリカの作曲家（1854-1931）、レッフラーはベルリンとパリでヴァイオリンと作曲を学んだ後にアメリカに渡ったヴァイオリニスト・作曲家（1861-1935）である。以下、多くの方には比較的なじみが

薄いと思われる作曲家の生没年と国籍のみ記載しておく。バントック（1868-1946、英）、ハドレイ（1891-1937、米）、カーペンター（1876-1951、米）、スコット（1879-1970、英）、ブリッジ（1879-1941、英）、キャドマン（1881-1946、米）、グレインジャー（1882-1961、濠。後にヨーロッパ、アメリカで活躍）、オルンシュタイン（1893-2002、米。生まれはロシア）。

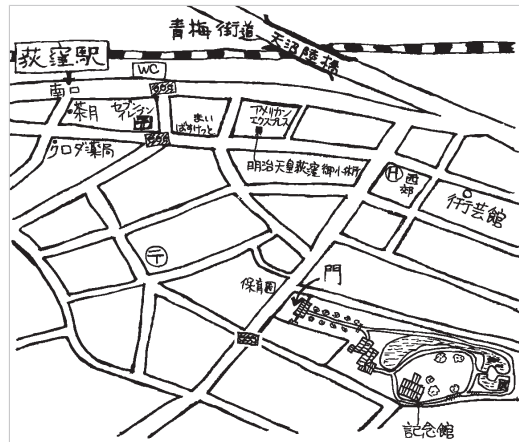
続編は、イギリスかアメリカに縁の深い作曲家が多い。マーラー、デュカ、グラナドス、シュミット、ラヴェル、プロコフィエフ以外、つまり20人中14人が英米で活躍した作曲家である。イギリス留学中に得られた情報によって執筆されたためであろう。

◆演奏会「ピアノの夕」

さて、『バッハよりシェーンベルヒ』を出版した年の暮から、大田黒は大森山王の自宅で「ピアノの夕」という小さな演奏会のシリーズを始めた。1915年から17年までの間に「十回くらいやつたかね」と述懐している（「大田黒元雄氏を中心にした座談会」、『音楽世界』7巻4号、1935.4）。多くは大田黒自身がピアノを弾き、20名ほどの聴き手に向けて新しい西洋の音楽を次々と紹介する演奏会だった。無料のプライベートコンサートのようなのだが、新聞などにも掲載されたい。曲目を記した二つ折りリーフレットは、小さいながら、版画家の長谷川潔（1891-1980）が表紙を担当しており、とても20数部しか作らなかったような印刷物とは思えない仕上がりである。大田黒記念館にはその貴重なプログラムが数点展示されており、主催者とその仲間たちが興味をもった音楽の傾向、アンテナの高さと志向がよくわかる。『続・バッハよりシェーンベルヒ』は、おそらくロンドンで得た情報によっているために、英米の作曲家が比較的多く取り上げられていたが、演奏会の方は、印象派の音楽、ロシアの音楽、北欧の音楽にもっと力点が置かれた選曲になっているように見える。

残念ながらここで紙幅が尽きそうなので、この注目すべき演奏会については、できれば次の機会にご紹介させていただくことにしたい。セヴラックの名は見当たらないようだが、当時、彼らがどのようなフランス音楽を発見していったのかを中心に見ていきたいと考えている。

年に一度の紅葉シーズンを迎えた今、大田黒公園の美しい時に拙文を掲載させていただけるのは嬉しいことである。まずはぜひ足を運んでみていただきたい（杉並区立大田黒公園：1月2日～12月28日の9時～17時開園、入場無料。駐車場なし）。



〈連載〉セヴラック随想 (6)

濱田滋郎

カントループの綴ったセヴラック像

ジョセフ・カントループ (1879-1957) と言えば、あの牧歌的な情緒に満ちた管弦楽伴奏の歌曲集、《オーヴェルニュの歌》の作者として、当日本セヴラック協会会員の中にもその名を大切に思っておいでの方が多いのでは? と考える。そのカントループは、彼ら二人の音楽のありかたを思えば当然かも知れないが、じつはセヴラックと浅からぬ縁がある。年齢からすればカントループのほうが7歳ほど年下だが、彼はセヴラックと同じスコラ・カントルム (ヴァンサン・ダンディが学長をつとめた音楽学校) に学び、やがて親交を結んだのである。そしてカントループは、兄のように慕ったセヴラックが亡くなって30年後になる1951年、その生涯、人となり、主要作品についてまとめ上げた立派な評伝を書いているのだ。この本はしかし、なぜかカントループの生時には発表に至らず、彼の没後27年も経った1984年によく、「ラングドック音楽学協会」というところから出版を見た (Joseph Canteloube : Déodat de Séverac / Société de Musicologie de Languedoc, 1984)。このように出版こそ遅れたものの、これは1930年に出されたブランシュ・セルヴァの最も古典的なセヴラック評伝に次いで、彼を直接に、しかも親しく識っていた人による貴重な著作なのである (なお、このカントループの本の出版にあたり「まえがき」を寄せているのが、私のかねがね好きなフランス人作曲家の一人であるアンリ・ソーゲであることも、なにか心嬉しい)。

彼自身の短い前書きにおいては、カントループは若い読者に宛てて、次のような意味のことを書いている——「君たちはまだ純粹で健全な心を持ち、現在 (註、1950年) のフランス音楽文化が陥っているいたずらな主知主義に毒されていない。だからきっと、セヴラックの音楽をそのままに受け取って理解し、愛することができるだろう。セヴラックはその全作品をもって、フランスの大地を歌った人なのだ」と。

この前書きについては、先年上梓され、ふさわしいだけの高い評価を受けている椎名亮輔氏の著書「デオダ・ド・セヴラック／南仏の風、郷愁の音画」(アルテス・パブリッシング刊)の中でも言及されている(174ページ)。そこにはまた、カントループがセヴラックをラヴェルと比較して、前者がつねに誠実、自発的かつ自然であるのに対し、後者は人工的で、作品は極度に精妙だが、花に例えれば香りを持たない温室咲きの蘭の花だ、と評したことも書かれている。椎名氏はカントループのこうした言葉について「セヴラックの音楽の正しい評価というよりは、自分の関心事に引き寄せて解釈し、提示するというやり方をとった。このことが、デオダの再評価に貢献するわけがない」と批判しておられる。これは正論に違ひなからう。しかし、カントループは、けっしてセヴラックを、“良い香



ジョセフ・カントループ
(1879-1957)

Joseph Canteloube :
Déodat de Séverac /
Société de Musicologie de
Languedoc, 1984



りのする音楽”を書いた、愛すべき地方的作曲家としてのみ讃美しているのではない。もっと幅広く、自然で健やかな音楽を書いた全人的作曲家として彼を重視しているのである。

すでに触れたとおり、カントループの本には、セヴラックとの個人的な触れ合いの思い出も綴られているのが心を惹く。彼と初めて知り合った1905年のことを、カントループはこう回想する——「(近くに住んでいた)私はしばしば、彼の家まで、朝、彼を起こしに行った。近くのバー・カウンターでそそくさとコーヒーを飲んだあと、私たちは散歩に出るのだが、それはしばしば疲れを知らぬ遠征にまでなった。パリの街中、更には郊外、森にまで。二人で語り合うのは芸術のこと、二人が大切に考えている地方文化のこと、音楽家としての努めのことなどだった…」

「時どき、私たちは友人に会いにも行った。ある朝デオダが言うには『僕と一緒に来ないか、とんでもない天才に会わせてやるよ。一緒に奴を楽しませてやろう!』素敵な季節だった。私たちは、ヴァル・ド・グラス街にある古い館の最上階にまで登って行った。そこの一室に、私たちはなるべく物音を立てぬように忍び込んだ。部屋のベッドには、一人の男が、しっかりと拳を握って眠っていた。デオダは私に水の入ったポットを渡し、自分も水差しを手にした。彼の目くばせを合図に、私たちは、寝ている男の顔、首、胸へと水浸しにしたのである。ベッドからはね出しながら、男の発した吠え声は、今もって忘れたれない!……私はマノーロに、このようなやり方で紹介されたのだ。ちなみに、私は彼と、後にセレ [セヴラックが住むようになる南仏の町] でもよく顔を合わせた」

上の文の“とんでもない天才”マノーロとは、カタルーニャ人の彫刻家マヌエル(愛称マノーロ)・ウゲのことである。マノーロは、セヴラックのほかラヴェル、フロラン＝シュミット、モーリス・ドラージュ、リカルド・ビーニェスのような音楽家たち、ポール・ソルドやシャルル・ラコストのような画家たち、レオン＝ポール・ファルグほかの詩人たち、その他パリの若くていたずら好きな芸術家や文人たちのグループ“レ・ザパッシュ”(アパッシュ＝ならず者たち)の一員だった。

時代をくだって、カントループがセヴラックの晩年と死を描くくだりも、また胸を打つ。

「1920年 [註。セヴラックが没する1年前] の5月、セヴラックはバルセロナ [スペイン東北部の主要都市] で催された、ジョフレ元帥の榮譽を讃える祭典のために招かれ、パラウ・デ・ラ・ムジカ (“音楽の殿堂”、バルセロナ名物のアール・ヌーボー式装飾を

施したホール)の大オルガンで、オルフェオ・カタラ(カタルーニャ合唱団)の愛好家たちに向けて、即興演奏を披露したのである。演奏は素晴らしく、聴衆のあいだに深い印象をとどめた。その頃の彼はまだまだ情熱に満ち、たくさんの計画を抱いていた。ただ、健康が彼には戻って来なかった……。

(同じ年の)6月25日、セヴラックはカルカソンス市の劇場で催された彼の作品のフェスティバルに臨席した。そのとき私は、病のために来られなかったリカルド・ビーニェス(スペイン人の高名なピアニスト)の代役という光栄に浴し、《セルダーニャ》全曲をはじめ、デオダの諸作品から抜粋を弾いた。また、彼との四手(連弾)で《風車の心》からの〈葡萄棚の踊り〉を弾いたが、二人とも傍若無人に、本来楽譜にはないことを弾きまくったのだ……」[してみると、カントループはピアノも上手だったらしい。]

「(1920年)秋には、デオダはフランスの音楽家の代表としてブリュッセル(ベルギー)に招かれ、そこで自作の劇付随音楽《スパルタのヘレネ》の演奏を聴いた。12月には何日かパリへ行き、幾人かの友人たちに、新作のピアノ曲《香と没薬 L'Encens et la myrrhe》を手書き譜により弾いて聴かせた。クリスマスには南仏に戻ったが、病はしだいに悪化し、心もとない状態になった。「私を一人にしないでくれ」と、友人に彼は頼んだそうである。

1921年に入るとデオダは形相が変わってしまったが、でもまだ普通に生活していた。1月には、彼はまだ友人たちをセレの自宅に呼び、散歩をすすめていた。1月23日にはベルピニャンでブランシュ・セルヴァの演奏会が、数日後にはトゥールーズでリカルド・ビーニェスの演奏会があり、どちらにも彼は出かけた。自作のメロディ(歌曲)の伴奏を弾くこともあり、彼はまだ音楽と計画とに満ちているように見えた。病の苦痛にもめげず、彼は常に優しく善良だった。

同じくセレで、彼の親友でありともに仕事もしたエミール・シカールが夭逝したことを、デオダは聞かされた。カテドラルでド・カルサラード大司教が執り行った葬儀において、デオダはオルガンに向かい、即興を奏でて参列者たちの心を奪った。数日後にセレでも亡き友の葬儀が行われ、その主催人ともなったデオダは、やはりオルガンの即興を奏でた。これがデオダの行った最後の即興、そして疑いなく、彼の最後の音楽的靈感であった。

友人の医師たちが手立てを尽くしたにもかかわらず、デオダの容態は、3月に入ると悪化した。同月19日、彼は、はっきりした意識のもとに最後の秘蹟を受けたが、直後、昏睡した。24日、聖木曜日にあたる日、彼は意識を取り戻し、「少し音楽を」と頼んだ。家族と親しかった一人の女性が、感動に負けまいと務めながら、《休暇の日々から》の〈シューマンへの祈り〉と〈オルゴール〉を弾いた。するとセヴラックはつぶやいた——「音楽は世の中でいちばん美しいものだ。私はこれのために生きて来たんだ」と。弾かれているのが自分の曲だと彼はよく分かっており、もっとつづけてくれるように、とうながした。そこで女性が〈ボンパドゥール夫人へのスタンス〉と〈私の可愛いお人形〉を弾くと、死にかけた人の唇から、こんな言葉が洩れた——「なんてさわやかなんだ。なんて自然で、いい彩りなんだ……」と。ピアノの弾きては、もう涙をこらえ切れなかった……少

しあとデオダは再び昏睡に入り、午後早くに息を引き取った。

葬礼はセレで、聖土曜日（26日）に行われた。町の人のすべてが葬列に加わった。土地の合唱隊ラルモニー・デュ・ヴァレスピールが先頭に立ち、コブラ（サルダーナを演奏する地方的な管楽合奏団）・マニャック＝マツもそこに加わって葬送音楽を奏でた。儀式を終えると、遺体はサン＝フェリクス・ド・ロラゲ（セヴラックの生まれた村）へ送られ、その小さな墓地に埋葬された。かつてデオダが、あれらの感動的なページのうちで、甘美な詩情と遣り場のない哀しみをうたった、その同じ墓地に。

そこでも、セレと同様、悲しみは住民みんなのものだった。トゥールーズからも、パリからも駆けつけた友人たちが一様に、深く真実な悲しみを交わし合った。私はリカルド・ビーニェスと墓地に入り、悲しみの中ではあったがいつきタバコを吹かした——眼下にひろがる景色の雄大さが、私たちがいま涙を捧げる芸術家にして詩人の性情と、あまりにもよく合致していたからである。実際、丘の上に設けられたこの墓地からは——本当に珍しいことだが——雪に覆われて陽光にきらめくピレネー山脈の全容を一望できるのである。そして、開かれた墓穴を見おろす樅の大木の上では、おぼろになりかけた陽光の中で一羽の小鳥が、生まれ出る春を歌っていた……。

その瞬間、あの忘れ得ぬデオダの一篇、〈春の墓地のひと隅〉と題されたページを、どうして思い起こさずにいられたろう？ なお輝かしくはあれ甘く優しくなった大気こそ、逝った音の詩人にふさわしいものではなかったろうか。そしてそれはまさしく、この土地そのものが、ああまでも自分を愛し、歌い抜いてくれた芸術家に贈る捧げ物ではなかったろうか？」

リレー連載

セヴラックと私

松田純子

日本セヴラック協会が設立されてから、もう10年の月日が経ってしまったことに、改めて驚いています。そして、セヴラックの存在すら知らなかった私が、この協会の事務局を10年も続けてこられたことは、さらに驚きです。これは皆様の温かいご協力の陰と心から感謝いたしております。

私がセヴラックという作曲家の名前を初めて耳にしたのは、今から25年ほど前、場所は、とある居酒屋でした。その日私は、舘野泉さんのレコーディングで譜めくりをさせていただいたのです。観客のいないホールの上ステージに上がり、間近で先生の演奏が聴けることの喜びと、初めてのレコーディング現場での緊張でドキドキの一日でした。

性能の良いマイクに音を拾われないように、息を殺し、音を立てないようにゆっくりと立ったり座ったり……。無事にレコーディングが終わり、その後の打ち上げで、先生やスタッフの方々と共に居酒屋で「乾杯!!」となったのでした。

その席で、先生は「セヴラックはいいよね〜」「いつか、絶対にレコーディングしたいなあ」と熱く語っていらしたのです。「えっ？ セヴラックって誰？ どこの人？ いつの時代？」と私の頭の中は「？」だらけでした。でもとにかく、舘野先生が少年の頃から愛し続けた作曲家の音楽ならきっと素敵に違いない……。そう思うと早く聞いてみたくてたまたま、先生に《セルダーニャ》と《ラングドック地方にて》という曲名を書いていただいた紙片を手にも、さっそくレコード店に行きました。チョコリーニの演奏するレコードを2枚手に入れることができ、セヴラックのピアノ曲と初めて出会うことができました。そしてもちろんすぐに、セヴラックが大好きな作曲家の一人に加わりました。

2001年、舘野先生の念願が叶い、ついにCD「ひまわりの海」がリリースされた時はほんとうに嬉しく、何度も何度も繰り返し聴いたものでした。

楽譜も音楽の友社から次々と出版され、私も時々弾いていますが、特にお気に入りの曲は《休暇の日々から》第1集です。優しさと愛情に満ち溢れ、どの曲も初めの1小節を弾いた瞬間から、優しさに包み込まれ、心がふっと軽くなり、慰められ、癒されます。

10年前、舘野先生からお電話をいただき、「セヴラック協会の事務局をやっているだけませんか？」と言われた時、ただセヴラックが好きというだけの私がお引き受けしていいものかどうか迷いましたが、この協会の入会資格は「セヴラックの音楽を愛好する者」ということでしたので、それなら私にも資格があるかしら？と思い、微力ながらお手伝いさせていただくことになりました。

現在の会員数は約70名。セヴラックという知名度の低い作曲家のファンが、日本にもこんなにいるということに、驚かされます。新しい会員の方に、セヴラックとの出会いについてお話を伺うのも楽しみのひとつです。会員の中には、プロの音楽家の方々も多くいらっしゃり、年2回の例会では、セヴラックの音楽の魅力を次々と紹介してくださっています。いつも快く引き受けてくださり、心から感謝いたしております。セヴラックという作曲家が出会わせてくれた人たちと、本当に贅沢な時間を共に過ごすことができ、幸せです。

この協会がこれかもますます発展し、末永く続いていきますように……。

第 20 回例会の報告

鎌田和夫

この夏は酷暑の連続でした。日照りが続いたかと思えば、と突然の雷鳴と豪雨。息苦しく、寝苦しく、体力の消耗した夏でした。

昨秋、脳梗塞を起こした身からすると、いつ再発するか知れぬ思いに、酒は週一度の休肝日を設け、水を飲み、なんとか乗り越えることが出来たようです。そんな自分の馬鹿げた日常の繰り返しのなかであって「館野泉フェスティバル～左手の音楽祭」が無事に最終回を迎えたことは大きな喜びでありました。

喜寿を迎えられた 11 月 10 日、東京オペラシティコンサートホールでの演奏会が最終日となりました。先生の熱い情熱に尊敬の念を禁じえません。その都度、新しい曲をプログラムに加えながら演奏する前向きなサービス精神。そんな凄い力の漲りを感じ、ただ感動にうろたえるばかりでありました。先生の全身に神が宿ったしかいいようがありません。これは館野泉に与えられた天の神の啓示ではないかと思ったほどです。一つのけじめをつかれた喜びをセヴラック協会の皆さんと一緒にかみしめることが出来ました。おめでとうございます。

前号の編集後記に亀田さんが書いていたように「人生を豊かにしてくれる、そんな不思議な作曲家がセヴラックなのかもしれません」と、セヴラック協会に集う人々の出会いの場のありがたさを語っていました。まさにその通りです。

例会のあった 5 月 25 日はうす曇りながら気持ちのいい日和でした。気温 22 度。4 月下旬並みということで、今夏の暑さなど想像もつかない陽気でした。

最初は森朱美さんのソプラノと末吉保雄先生のピアノでセヴラックの歌曲〈私の可愛いお人形さん〉。セヴラック協会の発足 10 周年に相応しく、甘い恋の歌での幕開けとなりました。

続いてセヴラックの歌劇《風車の心》第 2 幕第 3 場に先立ち末吉先生の解説。ジャックの母親が初登場します。ジャックの姿を見つけた母親は「人は運命にもあそばされる」とおもう。すでにマリーにはピエールという夫がいて、どうにもならないことを知っている。しかし、ジャックとマリーが愛し合っていることも知っている母親。夕焼けの美しい場面です、と末吉先生。

母親役をメゾソプラノの阪口直子さん。初登場です。ジャック役をバリトンの鎌田直純さん。粉引き爺さん役をバスバリトンの森田学さん。ピアノが末吉先生。

母親は「お前を見ていると何故か不安になる」と心のうちを訴えます。さらに「丘を吹く風をごらん。神聖な万物に向かって、優しさを与えている。それはジャック、お前に言って聞かせているのだよ」と。ジャックは「マリーを愛しているのは変わらない。彼女と一緒に村から出て行きたい」を諦めません。「一人になってしまうピエールのことを思うと、いたたまれない気持ちになる」と母。粉引き爺さんも「彼に何と言ったらいいのか。おお、ピエールのことを考えたら、あまりに残酷ではないか」とさとしませんが、ジャックには聞

く耳をもたない。それでも「丘を吹く風に聞くしかない」と、悲しそうな表情を浮かべるジャック。その悲しみを末吉先生のピアノが深く静かに奏めます。

休憩後は、水月恵美子さんのピアノでセヴラック〈ショパンの泉〉。ワルツの軽やかな繰り返し心地よく響いて来ました。時代はズレますが、セヴラックがショパンと楽しげに語り合っている。それも音楽の話ではなく葡萄酒の話。ラングドック地方の葡萄酒の、豊潤で、滋味ゆたかな味を熱弁するセヴラック。それをショパンがチーズをかじりながら面白そうに聞いている、といった二人の情景が浮かびました。

続いて館野先生の登場。モンサルヴァーチェ《左手のための三つの作品》の予定でしたが「地方公演が続き、世界初演の曲を9曲もやってきましたから、恥かしいのですが練習ができずに今日を迎えてしまいました。本日は今まで弾いていた中から、気に入った曲を選んで演奏します」ということで、最初はスクリャーピン《二つの小品》。そのの詩を。

とぼとぼと									
ひとり静かに	どこまでも								
とぼとぼと	とぼとぼと								
うしろ姿の	おかしみの								
哀しげに	おどけつつ								
背中の方	ちからなく								
弱りゆく	ためいきの								
休むことなく	ほそきみち								
かぎりなく	つかれはて								
ゆらりゆらりと	くらがりを								
歩みゆく	あゆみゆく								

2曲目は吉松隆「海鳴り」。そのの詩を。

消えゆく波の									
白波の	流れつつ								
はじける磯に	栄枯盛衰								
泡のたち	なにごとも								
自由な舞いの	なかつたように								
あでやかに	海鳴りの								
消えゆく波の	消えゆくナミダ								
海鳴りの	虹色に								
砂に逃れん	あとを残さず								
	ああ海鳴りの								
	響きあい								
	天に消えゆく								

最後はカッチーニ《アヴェ・マリア》。その詩を。

静かなる

静かなる
幼子の
むさぼるように
母の胸
心ゆくまで
深き愛
からだの中に
感じとり
いやされん

母の手の
ぬくもりの
ほっとしながら
やさしさの
愛のしずくの
ゆりかごの
厳かな中
ゆるやかに
目覚めたり

ちいさな手
忘れぬ母の
あたたかさ
いつまでも

編集後記

2009年から続いてきた歌劇《風車の心》の連続上演は、今回で一区切りです。

毎回、数場面を取り上げ、末吉保雄先生によるお話と、鎌田直純先生による台詞の朗読付きで、この歌劇を初めて見る私たちにもよくわかるように演奏されました。朝の連続ドラマを見ているかのように、程よい長さで、ドラマの続きが気になるところで終わるのが面白く、大変好評でした。最終回を迎え、ジャックやマリーや登場人物たちのどうなるのか、筋を知っていても、ドキドキします。大変楽しみです。

来年（2014年）の5月25日には渋谷の大和田区民センター伝承ホールで「総集編」として、全体を通して上演します。これまで見逃した方も、毎回欠かさず御覧になった方にも、この素晴らしい歌劇の全容を知る、またとない機会になります。ぜひお誘い合わせの上、ご来場ください。

日本セヴラック協会全体で協力して、このイベントを充実したものにしましょう。

セヴラック通信 第15号 2013 後期 日本セヴラック協会 会報

2013年11月16日発行

発行：日本セヴラック協会

<http://www.geocities.jp/severacjp/index.html>

E-Mail: severac.japon@gmail.com

名誉会長◎カトリーヌ・ブラック・ベレール

顧問◎館野泉、濱田滋郎、末吉保雄、小沼純一

事務局◎伊東美香、亀田正俊、窪田葉子、松田純子

事務局：松田純子◎〒247-0013 横浜市栄区上郷町 262-32-5-204 TEL & FAX: 045-895-2317

連絡先：亀田正俊◎ TEL&FAX: 042-502-7227 / E-Mail: kameyan@jcom.home.ne.jp

印刷・製本：フェデックス・キンコーズ・ジャパン

